

2018 年度（2018 年 9 月）

Diploma Policy に関わる卒業（観点別・就業力）アンケート結果について

長崎外国語大学では、卒業認定・学位授与の方針（Diploma Policy）については以下のように定めている。

長崎外国語大学では以下のような能力を身につけ、かつ所定の単位を修得した学生に、卒業を認定する。

- (1) 学部共通カリキュラムの多面的履修を通して、基礎的な学習能力を養うとともに、人間・社会・自然に関する知識を自らと関連付けて理解し、専門領域を超えて問題を探求する姿勢を身につける。
- (2) 学科における体系的学習と学科を横断する幅広い学習とを通して、外国語の運用能力と専門分野の知識を獲得し、地域や現代世界の多様な課題を発見、分析、解決に導く能力を身につける。
- (3) 4年間にわたる教室内での学びや、プロジェクト科目、海外留学、卒業論文等の作成を通して、知識の活用能力、批判的・論理的思考力、コミュニケーション力、課題探求力、問題解決力、リーダーシップなどを総合する力を身につける。

かかる Diploma Policy（以下 DP）に基づいて Curriculum Policy（学士教育課程の編成方針）が設計されることになるが、DP において学生が身につけるべき能力をカリキュラムマップ上において科目群毎、各科目毎に明示している。つまり、教育課程編成上のどの科目でどのような能力が養われるのかを明らかにしている。身につけるべき能力を5つの観点によるカテゴリーに大分類し、さらにその5つのカテゴリーを小分類化して教育課程上に科目を位置づける（カリキュラム・マップ）ことによって、学生たちが養うべき能力を見極めながら科目の選択を行える体制をとっている。（DP による5つの観点はシラバス上に記載してある。）

卒業時に行うこのアンケートは、1年生秋学期から毎学期行われているもので、DP に関わる本学での4年間の学修に対する学生による最終的な自己点検評価であり、本学の3つのポリシーに新たに加わるアセスメント・ポリシーに関わるものである。このアンケート結果によって、さらなる3つのポリシーの改訂や教育課程の編成などに生かしていく所存である。

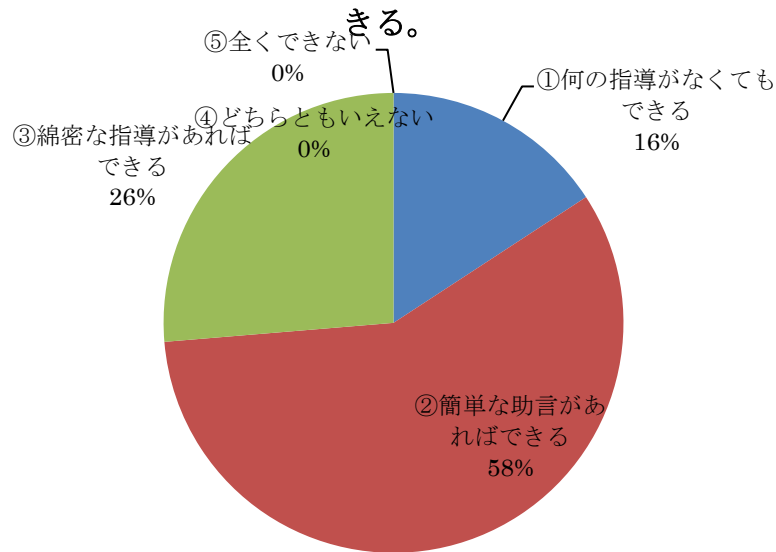
次ページ以下では、各カテゴリー別に簡単ではあるがコメントを付している。なお、本報告は、学科毎ではなく、2学科あわせた学部（卒業生31名のうち回答者19名：回答は実数）としてのアンケート結果によるものである。なお、アンケートは以下の観点別能力についての自己点検評価として回答を行う。

教育支援部長
小鳥居伸介
2019年9月30日

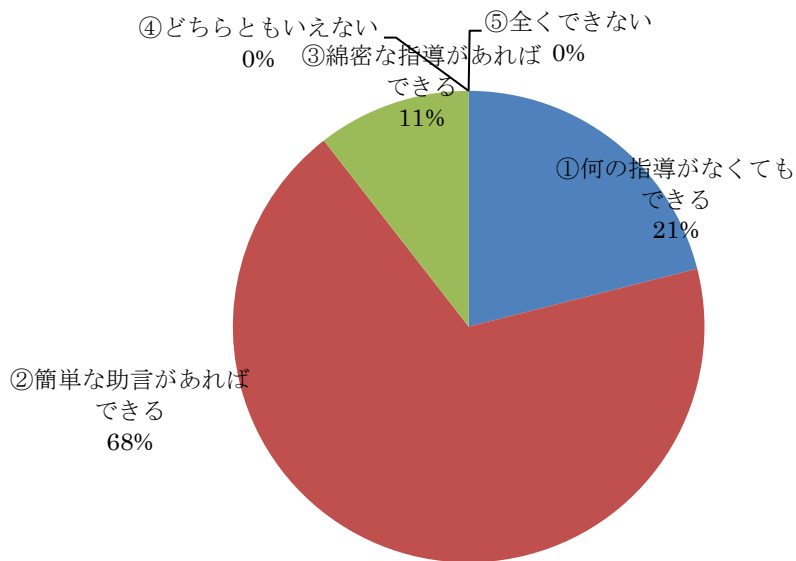
		①何の指導がなくてもできる	②簡単な助言があればできる	③綿密な指導があればできる	④どちらともいえない	⑤全くできない	無回答	合計
カテゴリ A [理解し、知識を取り込む力]	1. 歴史・社会・自然を自らと関連付けて理解し、説明することができる。	3	11	5	0	0	0	19
	2. 専門分野における知識を体系的に理解、実践に応用することができる。	4	13	2	0	0	0	19
	3. 進路の多様性や特質について理解し自らの進路選択に効果的に活用することができる。	6	8	5	0	0	0	19
カテゴリ B [論理的思考力・問題解決力]	4. 情報や知識を多角的な視点から論理的に分析し表現できる。	3	11	4	1	0	0	19
	5. 論理的思考に基づき、様々な状況に応じて的確な判断を下すことができる。	5	9	5	0	0	0	19
	6. 問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を解決に導くことができる。	4	9	6	0	0	0	19
カテゴリ C [態度・意欲]	7. 自らを律し、自立して積極的に行動できる。	6	9	4	0	0	0	19
	8. 異なる文化に対して、深い認識と共感を持って接することができる。	8	9	2	0	0	0	19
	9. 社会の一員としての意識を持ち、社会の発展のために積極的に関与できる。	6	7	5	1	0	0	19
カテゴリ D [コラボレーションとリーダーシップ]	10. 目標達成のために他者と協調・協働して行動できる。	7	11	1	0	0	0	19
	11. 目標達成のために他者に方向性を示し、協力を得ることができる。	5	10	3	1	0	0	19
カテゴリ E [効果的なコミュニケーション力]	12. 日本語で正確に意思の疎通を図ることができる。また、理論的に記述し、的確に発表し、討議を行うことができる。	4	13	2	0	0	0	19
	13. 少なくとも一つの外国語を用い、正確にコミュニケーションを図ることができる。	5	10	4	0	0	0	19
	14. 情報通信技術を用いて多様な情報を収集分析し、効果的に活用することができる。	4	10	5	0	0	0	19

カテゴリ A [理解し、知識を取り込む力]

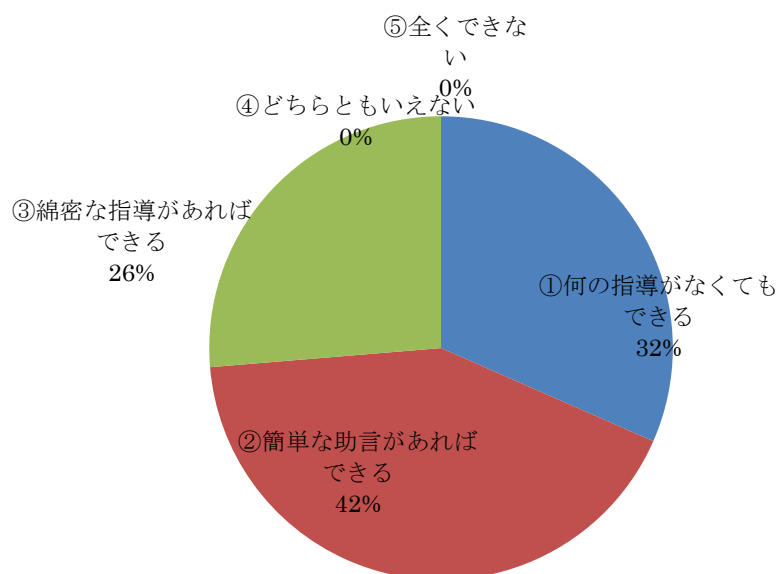
1. 歴史・社会・自然を自らと関連付けて理解し、説明することができる。



2. 専門分野における知識を体系的に理解し、実践に応用することができる。



3. 進路の多様性や特質について理解し、 自らの進路選択に効果的に活用することができる。

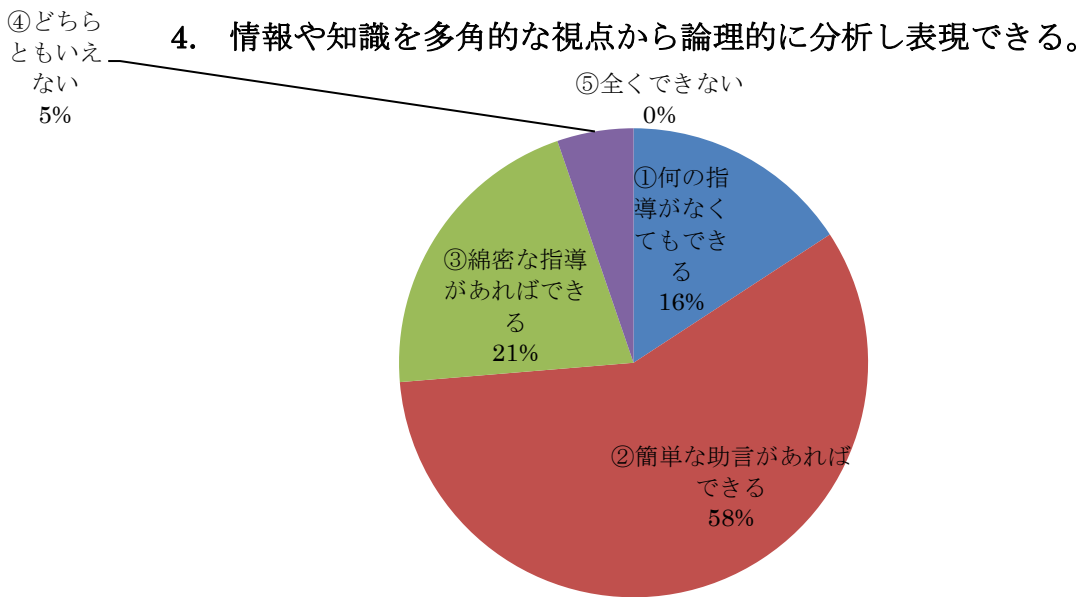


カテゴリAは、いわゆる知識や教養を身につける力、インプット能力の自己評価である。

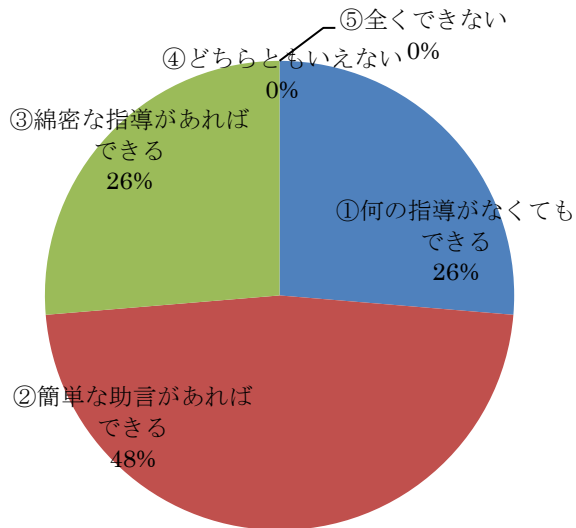
9月卒業者については、「何の指導がなくてもできる」と「簡単な助言があれば・・・」と自己評価した学生の合計の比率が3月卒業者ほぼ同じ程度であるが、「簡単な助言があればできる」という回答の比率は9月卒業者の方が多い。これは9月卒業者のほとんどが外国人留学生で、今回の回答者も全員留学生ということで、日本語力の問題などがあり、主体的学びに向けた学修面での何らかのサポートやアドバイスと言った「助言」が必要とされているようである。明確な誘導や簡単な指導に従うことなしに、必要とする情報や知識を獲得したり、これを適切に活用したりすることは難しいと自己評価している学生がやはり多いことを意味している。多角的で多様な情報や知識の中から、自分なりに取舍選択しながら必要なものを取り込む際の主体が確立していないことが課題かもしれない。

主体的な学びを育むことが求められていることから見れば、カテゴリAにおける「何の指導がなくてもできる」割合を向上させていくためにはどうすれば良いのか、知恵を出し合うことが必要だろう。

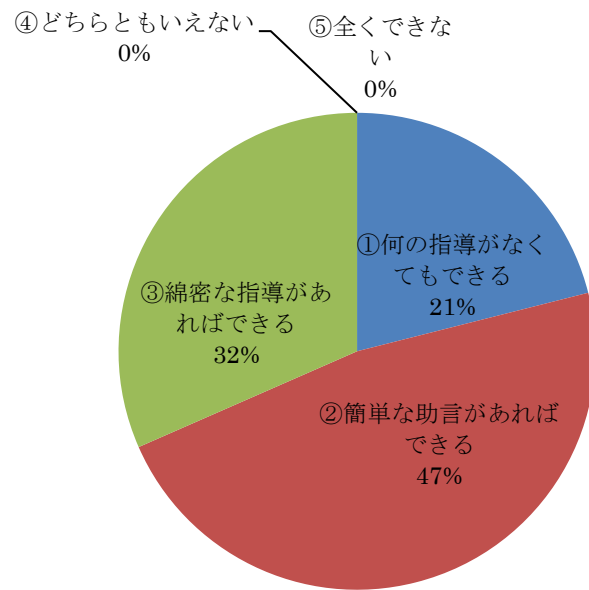
カテゴリ B [論理的思考力・問題解決力]



5. 論理的思考に基づき、
様々な状況に応じた的確な判断を下すことができる。



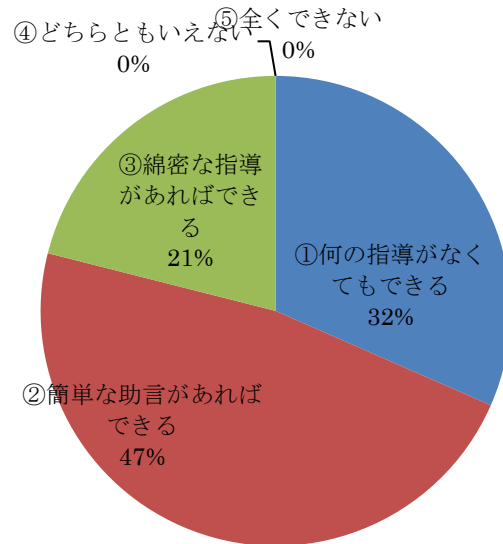
6. 問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を解決に導くことができる。



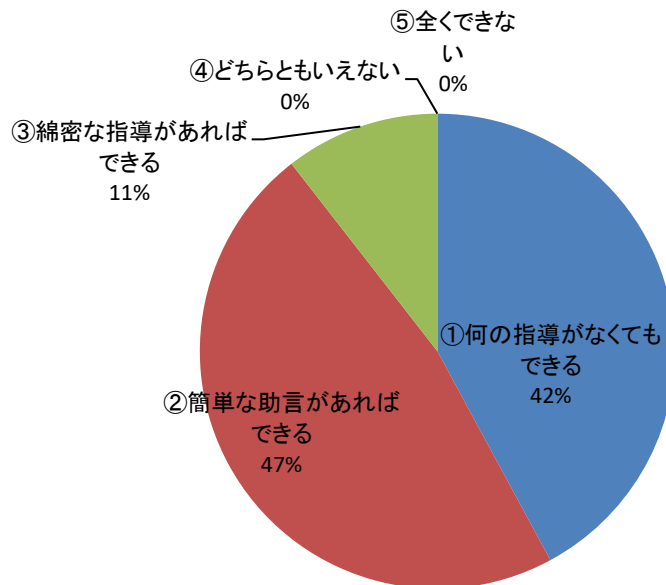
カテゴリBは、発見力・分析力・思考力・判断力・意志決定力・課題解決力などに関する自己評価である。「4.」のカテゴリは、3月卒業生に比べるとおよそ半分である。これはカテゴリAと同様、日本語力の問題があるために、何らかの指導・助言が必要なのではないかとと思われる。「5.」のカテゴリでは、ほぼ3月卒業生と変わらない。「4.」「5.」の合計の比率については、ほぼ3月卒業生と同じである。「6.」については、3月卒業生とほぼ同じである。カテゴリAと同様、主体的学修力育成の観点からすれば、このカテゴリも「何の指導がなくてもできる」学生たちを輩出するためにどうすれば良いのかが課題である。

カテゴリ c [態度・意欲]

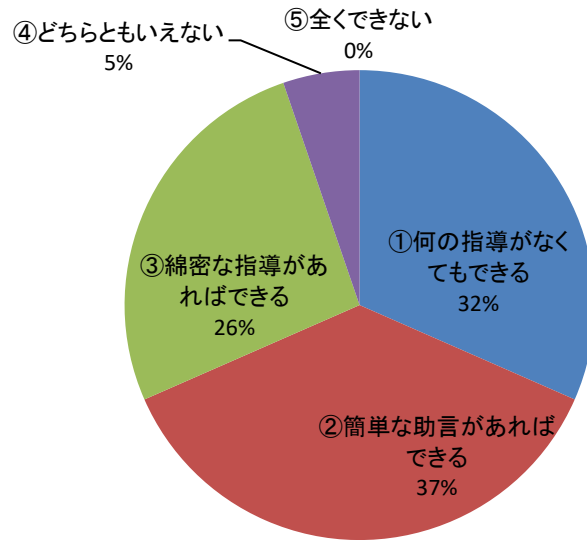
7. 自らを律し、自立して積極的に行動できる。



8. 異なる文化に対して、深い認識と共感を持って接することができる。



9. 社会の一員としての意識を持ち、社会の発展のために積極的に関与できる。

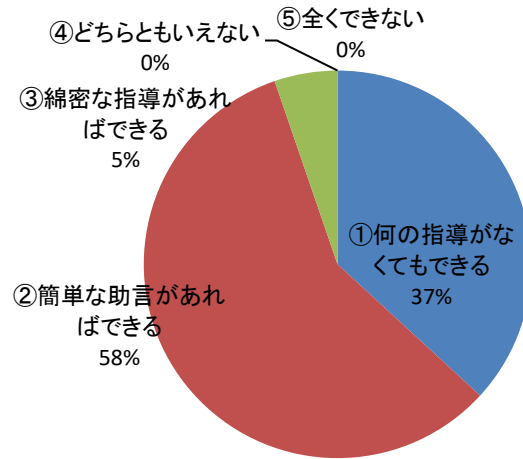


カテゴリCは、行動力や積極性、認識力や社会性などに関する自己評価である。

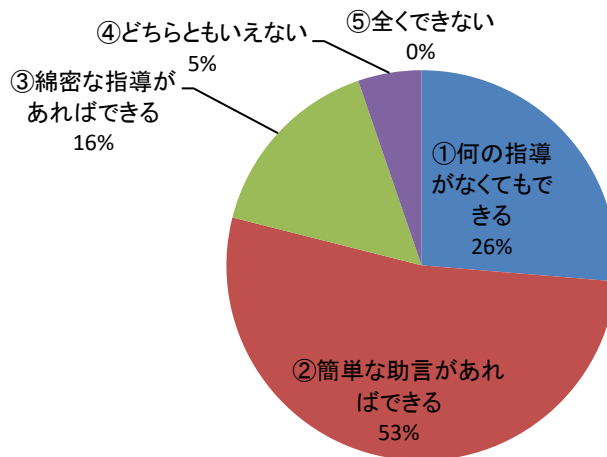
他のカテゴリと同様に、「何の指導がなくともできる」「簡単な助言があればできる」を合わせると、4人に3人が積極的に行動できる、また異文化交渉に問題を感じないと自己評価している。「7.」「8.」については、3月卒業生と同様に、8割程度の学生が肯定的に自己評価していることが分かる。「9.」については、3月卒業生よりも「綿密な指導があればできる」という回答が10%も多い。これも回答者が留学生であることで、指導が必要と自己評価している者が多いのではないかとと思われる。

カテゴリ D 【コラボレーションとリーダーシップ】

10. 目標達成のために他者と協調・協働して行動できる。



11. 目標達成のために他者に方向性を示し、協力を得ることができる。



カテゴリDは、協調性や協働力、実現力や率先力などに関する自己評価である。

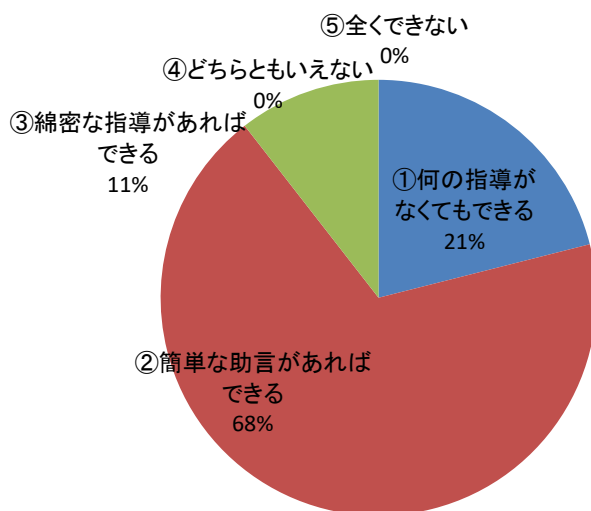
「10.」では、3月卒業生よりも「何の指導がなくてもできる」「簡単な助言があればできる」を合わせた比率が15%も多い。とくに「簡単な助言があればできる」という回答が3月卒業生よりも25%も多くなっている。この部分も他のカテゴリと同じく、留学生の回答の特徴かもしれない。

「11.」の方では、3月卒業生とほぼ同じである。協働力と率先力は、一見するとかち合うように思われるが、組織的目標実現行動における能力として求められるものであり、本学の学生たちがその両方において高い自己評価を与えていることは心強いものがある。

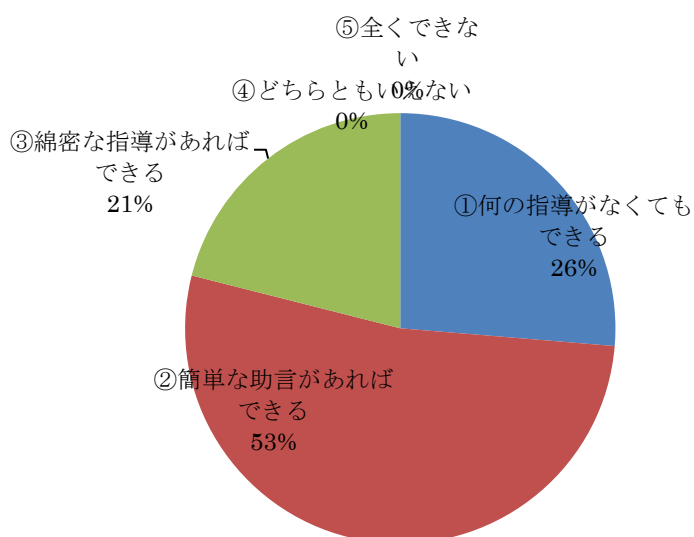
なお、カリキュラムマップにおいて本カテゴリの能力を育成する科目がきわめて不足しているにもかかわらず、それでもなお本学学生の自己評価の高い本カテゴリ能力を伸ばすためにも、教育課程における科目設計が必要だと考える。

カテゴリ E [効果的なコミュニケーション力]

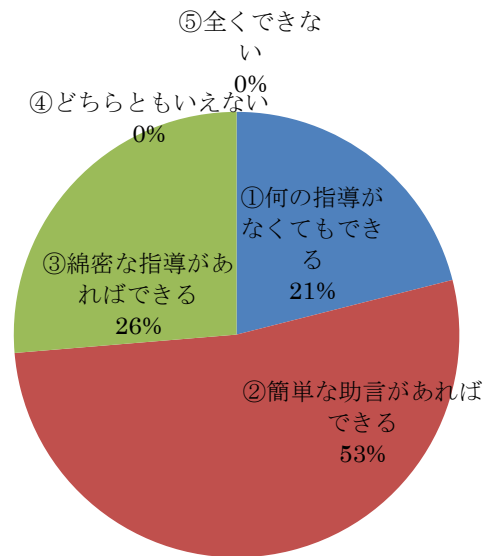
**12. 日本語で正確に意思の疎通を図ることができる。
また、理論的に記述し、的確に発表し、討議を行うことができる。**



**13. 少なくとも一つの外国語を用い、
正確にコミュニケーションを図ることができる。**



14. 情報通信技術を用いて多様な情報を収集分析し、効果的に活用することができる。



カテゴリEは、コミュニケーション力や表現力、ICTなどに関する自己評価である。

本学においても重要なカテゴリと言える。3月卒業生とほぼ同じ比率の回答であるが、項目「12. 」と「13. 」において、少なくとも「何の指導がなくてもできる」「簡単な助言があればできる」を合わせて90%以上の数字がほしいところである。カテゴリA・Bと併せて考えてみれば、どうも教養、専門、言語の学修成果に関して自信がなかなか持てないと自己評価している学生たちが多いと言えるのかもしれない。その他のカテゴリの成果を活かすためにも、これまでと同様に、この点はやはり検討課題となろう。

ICT に関して同様に、思ったほど高い数字は出ていないのは、昨今のPC離れとも言われている現状を示しているようである。「14. 」における①、②を合わせると3月卒業生とほぼ同じ比率である。なお、「簡単な助言があればできる」の回答が3月卒業生よりも12%高いのは、やはり留学生の傾向を示していると思われる。留学生においても、携帯をICTの道具とし、PCに触れていない者が増えているようである。いまだPCがICTの主要機器である以上、情報教育はむしろ今以上に必要になるのかもしれない。

カテゴリAからBについて「何の指導がなくてもできる」および「簡単な助言があればできる」との回答は7割台で、カテゴリC、D、Eについてはおおよそ7割~8割台の回答率となっており、それぞれのカテゴリでコメントしたように、こうした点が本学学生の特徴であるといつてよいのだろう。なお、3月卒業生との比較では、3月卒業生における留学生の回答者数が2017年度で95名中11名、2018年度で120名中16名であり、9月卒業生の回答者が100%留学生であることを考慮すると、9月卒業生の回答は留学生の傾向を示していると考えられる。より正確に分析するには3月卒業生における日本人と留学生を分けた分析が必要となるが、今回はそのデータがないので、次年度以降の課題としたい。

(以上)